

米国の幼児教育における五つの実験（八）

大戸 美也子

四 フォロー・スルー・プログラムの評価

フォロー・スルーのプログラムは二つの側面をもっていた。ひとつは、子どもへの総合的サービス・プログラムとして、これに参加する子どもや親のより良い発達の確率を増大させる仕事であり、もうひとつは、補償教育に関する実験プログラムとして、さまざまな開発された教育モデルを検討し、望ましい方法の性質と効果の範囲を明らかにする仕事である。従って、フォロー・スルーの評価も、総合サービスの累積的效果に関する評価と、計画的にプログラムの変数を評価するものとの、二つの立場から諸研究を整理していく必要がある。

(1) 総合的サービスの累積的效果

フォロー・スルーは、内容的にヘッド・スタートを小学校三年まで継続したものであるから、これを評価する方法(Hatlegren)は、基本的にヘッド・スタートのそれと共通している。フォロー・スルーの学級の子どもや、その親・教師の行動や態度のある断面の「平均値」と、同じような背景をもつフォロー・スルーの「子ども」へらと比較するやり方である。フォロー・スルーの「子ども」への影響については、認知能力のみに焦点をあてたもの(Weisberg, 1976)から、認知能力、学習到達度、認知的要求に対する反応スタイル、母子関係、社会適応力等、総合的に診断しようとする研究(Bissell, 1971; Ryan, 1974)まであるが、研究結果はいずれも、フォロー・スルーのポジティブの影響を伝えている。子ども

の「親」への影響をみたものに、親の子どもに対する態度、家事や子どもの世話にかける時間を研究したもの (Cline, 1974)、あるいは親の学校における教育上の決定への参加度に焦点をあてた研究 (Goldberg, 1974) があるが、ここでもフォロー・スルーの有意な効果が認められている。特に、ゴールドバーグの研究では、フォロー・スルー学級の親の九〇パーセントは、このプログラムの子どもへの有効性を主張し、八〇パーセント以上が自分たちの意見がこのプログラムに反映していると確信していた。また、この研究はフォロー・スルー学級の「教師」への影響を教師の移動率から調べているが、それによるとこの学級の教師の移動率は平均より低く、プログラムへの関心度も強いことを示している。以上のような研究は、補償を必要とする子どものために開発された特別のサービス、援助の方法が、一般的にいつて「直接的影響」を与えていることを示しているが、長期にわたってこの影響が続くか否かは、今後の研究を待たねばならない。

(2) プログラム別にみた効果の比較

補償教育の長期的影響をはかるためには、その前提として、その直接的影響のメカニズムについての知識が必要である。どのよ

うなプログラムの内容や技術が、子どもや子どもをとりまく人々にインパクトを与えるのだろうか。ブランド・ヴァリエーションという考え方は、ヘッド・スタート児にさまざまに定義される「教育的環境」や「学習状況」の実際影響力を評価し、それによって補償教育改善の場所を明らかにしようとするものである。この評価のために、よく定義されたプログラムを選択し、そのプログラムの独自な実践を「観察」し、子どもの特定の行動や態度を「評定」して、プログラムの影響をみる方法をとった。このような方法で展開したプログラム評価研究のいくつかを次に見ていく。

スタンフォード研究所の全国調査研究

これは、連邦教育局がスタンフォード研究所に委託した研究で、最も規模の大きなプログラム変数をみる研究である。一九六九年より、十二の方法の異なるモデルの実践過程を観察して、一九七三年夏最終的報告が提出された (Stearn, 1973)。

〈研究目的〉

- 1、十二のプログラムは、実際にどの程度異なっており、違った扱いを展開しているか。
- 2、個々のプログラムの教育目標は、どの程度現実に実行されているか。

3、教育方法と、認知テストや学習到達テストで得られるような子どもの能力との間に、何らかの関係があるか。

この三つのねらいは、それ自体特色はないが、特定の教育実践の子どもへの影響をとらえる手続きの基本的シークエンスを示しているように思う。

〈研究方法〉

1、年度の初めと終りに、IQ、学力達成テスト等を実施する。

2、年度内に二度、特別に開発した観察によって保育場面を観察する。

3、データは一定の分析基準にそって分類し、コンピュータで処理する。

〈主な結果〉

1、モデル・スポンサーは、いくつかのタイプに分類できるが、全体としては差異よりも類似性の方が大きかった。

2、プログラムの目標と、それを実現する行動の間に高い一致度がすべてのプログラムに見られたが、同一プログラム内の教師間の一致度は低かった。

3、教育方法とテスト結果の関係は不明瞭であった。

この結果は、各プログラム・スポンサーの意図している目標が、

現実に実施されていることを証明したにすぎないが、その後の研究では、プログラムの力点、特定の子どもの行動との関連性を示すものが多い。

他の研究

スタンフォード研究所のストーリーリングス (1974) は、七つのプログラムを五か所の地域で、各二十クラスにおいて実践したものを分析した結果、自由な活動を許すクラスで「独立行動」と「協同行動」が、構造化されたプログラムのクラスで「自己学習」あるいは「課題への持続性」の長いことを見出している。この結果は、十種類のプログラムで評価研究をおこなったアプト研究所のベッカー (1974)、七種類で分析したフロリダ大学のソアー夫妻 (1972) の研究でも支持してしている。このような研究の伝えることは、各プログラムの目標がかなりの程度実現しているということで、望ましい補助教育プログラムを結論づけるには、さらに多くの研究を必要としているように思われる。

五 フォロー・スルー・プログラムの考察

フォロー・スルーが、補償教育をはじめとして、公立の学校教

育や教育実践研究に及ぼした影響について要約してみる。

補償教育への影響

ヘッド・スタートは、多面的サービスを、多くの人々の参加によって、これを必要とする人々に届けることができる、という確信以外、何ら有効な方法をもたないで、史上最大の幼児教育プログラムに突入したことはすでにみた通りである。「無知と希望の上で造られた」(Hunt, 1976)即席のプログラムは陶冶され、最後に残った二十のプログラムには、補償教育としてのどのような共通点をもっているだろうか。先号、その内六つのプログラムについて共通のカリキュラム構成要因を手がかりに、比較マトリックスを作成したが、これを基礎にいくつかの共通点を列挙すると次のようである。

- 1、補償教育を必要とする子どもを多面的に理解している。
- 2、どのプログラムもそのスタイルは異なるが、子どものモチベーションに関心をもっている。
- 3、そのモチベーションを刺激する教材・技法を組織化している。
- 4、子どものみならず、子どもをとりまく人々も教育に巻き込

み、子どもの人的環境の質の一貫性を目ざしている。

5、実践をフィード・バックする手段を開発し、常にプログラムの改善に活用している。

こうした事柄が、内容は異なっても生き残る条件として作用していると思われる。

公立学校への影響

フォロー・スルーは、基本的に子どもの要求と課題の要求の調和をめざしたプログラムであり、対象は限られていたが、プログラム作成のひとつの理想を実現したのであった。しかも、プログラムの望ましい形はさまざまあり、その効果も子どもによって、あるいは子どものおかれている状況によって異なることが、評価研究によって証明された。このことは、従来、プログラムといえ、すべての子どもに合わせようとするがために、どの子どもにも合わない標準カリキュラム作成を至上とするプログラム観から教師を解放し、プログラムとは、子どもの状況、子どもをとりまくものとの関係で多様に創造するものという見方を育てているように思われる。

教育実践研究への影響

ある特定のプログラムと子どものある行動とを関連づけるとともに、図(次頁参照)のA・B・Cの解決を前提とする。特定のプログラムの特殊性を、さまざまな影響因子から出す作業(A)を経て、それがとらえられて(B)、しかも多数の行動の中からある行動をプログラムの特性因果と関連した行動を見分け(C)られて、ゴール(D)に到達するのである。フォロー・スルー研究は、このようなプログラム評価研究の軌道をひいたといえる。

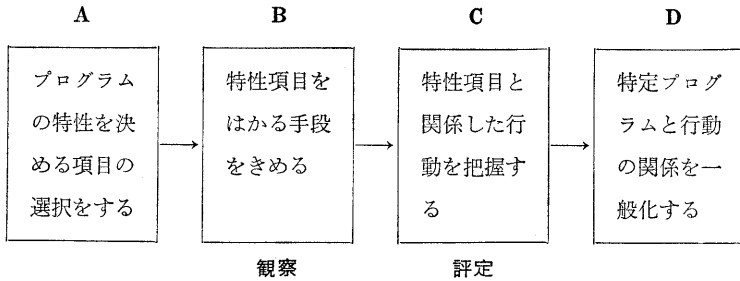
第二に、この軌道によって評価研究をすすめる過程で「行動観察」と「行動評定法」を著しく発展させた。最近、いわゆる客観的な「行動観察」が増え、教育状況への研究は高まってきたと、ますますたった一つの効果的な教育方法ではなく、多数の方法がみつかってくるとは面白く傾向である。

(〇〇〇)

文献

1. Becker, W. C. *Early Indications of Positive Outcomes*. Washington, D.C.: National Follow-Through Sponsors Presentation, Education Seminar, Feb. 1974.
2. Bissell, J. S. *Implementation of Planned Variation in Head Start*. Washington, D.C.: U.S. OED.
3. Cline, M. G. et al. *Education as Experimentation: Evaluation of the Follow-Through Planned Variation Model*. Vol. 1A: Early Effects of Follow Through Cambridge, Mass.: Abt. Ass. Inc. Mar. 1974.
4. Goldberg, M. *Hopeful Signs for Urban Education*. Washington, D.C.: NF·TSP, Educational Seminar. Feb. 1974.
5. Hunt, M. 幼児の知的発達と教育(金子書房 1976)
6. Stallings, J. *What Teachers do makes a Difference*. Paper presented to EC Conference on Evaluation. Anaheim, Calif.: 1974.
7. Stearns, M. S., et al. *Classroom Observation Study of Implementation in HS Planned Variation*. ERIC 093-479.
8. Weisberg, H. *Short Term Cognitive Effects of Head Start Programs*. ERIC 093-497.

実践研究をすすめるストラテジー



第7回

みどり会夏季研修会のお知らせ

幼児教育も核心をつくる時代となりました。毎年の研究の上にさらに研究・研修をして、幼児教育の深さを追求したいと思います。

ご参加をおまちしております。

○期日 昭和52年8月21日(日)～8月23日(火)

2泊3日

○場所 熱海市 岡本ホテル

○費用 参加費 5000円

宿泊費(2泊6食) 13,000円

○定員 300名

○内容・講師陣はただ今交渉中。

講演・分科会で研修いたします。

申込方法、その他詳細は本誌6月号でお知らせしますので、
ごらんください。

